

北関東

建築用石材「大谷石」(おおいし)の産地として知られる宇都宮市大谷地区で、ヒートポンプにより採石場跡地の地下水をイチゴの通年栽培に利用する試みが始まる。1年を通じ一定の温度を保つ地下水をハウスの冷暖房に使う。6月中旬にも夏から秋に収穫する「なつおこめ」の栽培を始め、冬には一般的なイチゴ栽培も始める方針だ。

2015年度から大谷で、なつおこめを栽培する「ファーマーズ・フォレスト」(宇都宮市)が、新設した2棟のハウスで通

地下水でイチゴ通年栽培



年栽培に挑む。熱供給は熱利用システムを販売するクラフトワーク(同)

宇都宮・大谷地区 月内にも開始

クラフトワークの熱供給システムを利用したハウスでの農産物栽培

が他社と組んで17年に設立した会社が出う。

夏から秋は一般的なイチゴ出荷の端境期にあたり、この時期に出荷できるのは高い価格での販売が見込める。ヒートポンプは冷暖房どちらにも使えるため冬季のイチゴ栽培でも省エネ、低コストが期待できる。通年栽培にあたり、地下水からヒートポンプを

採石場跡地の「熱源」活用

使って温熱や冷熱を取り出し冷暖房に利用するシステムを導入する。採石場跡地にたまった大量の地下水は1年を通して10度前後と一定の温度を保っており、熱交換システムに適用している。

冷暖房システムの設計や製造はクラフトワーク、地下水の監視などを川崎地質、全体の運営を八千代エンジニアリング(東京・台東)がそれぞれ担当する。

ファーマーズ・フォレストはまずなつおこめを栽培し、冬以降はなつおこめとイチゴ栽培を後押ししたいとめざす一般的なイチゴ

の生産も始めたい意向だ。松本課社長は「今までに無い新しい仕組み。大谷から日本モデルを作りたい」と意気込む。

クラフトワークの益子進会長は「(地下水という)熱源が大量に安定的に存在する大谷の環境は世界的にもまれ」だと話す。ここ数年なつおこめを栽培には大谷の地下水を利用してきたが、冬のシーズンが初めて。採算性は未知数だが、事業を軌道に乗せて大谷でのイチゴ栽培を後押ししたいとめざす。